

あちこちからこうも淫らな手つきで^{さわ}触られていては、なおさら力など入らなかった。

「ひ♡、い♡♡、ああっ♡ああっ！♡♡」

ぐちゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅっ——

腰の揺さぶりはいつしか大きな抜き差しへと転じている。

^{はげ}烈しくなる抽送の一方で、舐じゅうを這う男たちの手つきは繊細になっていく。

木いちごのように硬くなった乳首の片方には舌すらも這わされ、唇で包み込まれたと思ったら、じゅっと音が立つほど強くすすられ、甘い痺れが抜き差しされている腰に落雷する。

「ああっ♡♡だめ、え♡も……おかし、く…な…っああッ…っ！♡♡♡」

ぬちゅぬちゅぬちゅ——ッ

もはや男を受け入れるためだけにしつらえられた孔のように、後孔は抵抗を感じなかった。苦しさなどもうどこにもない。水の中を男がぬるぬると行き来する感覚だけが、少年を内側から狂わせていく。

「ひい…っ♡ああ…っ♡♡あっ！♡あッ♡、ああっつ、ッ！♡♡」

乳首だけでなく、首筋や脇腹、足の指にまで、男たちに舐めしゃぶられる。その

どれもが驚くほどに気持ちよく、自分がどうしようもなく淫らな生き物になり果ててしまったように感じる。

(だめ——もう、だめ——！)

自分の帰るべき村のため、もう達^いってはならないのに。

男に挿入^{いれ}られて熱くなった腹底がいつそうジンと燃え立ち、何かを訴えるように痙攣する。そうなるとう、自分の意思ではどうにもならない。

「あ♡あぁ♡♡♡あ♡、あああああーッ！♡♡♡」

悲鳴をあげ、ゆるゆると扱かれていた竿から盛大に精を噴き上げた。男たちの手も舌も生^{なまぬる}温い中で、自分の精だけが燃えるように熱い。

「ひう、！♡♡いやあ……っ」

もう少しで精を吐き出しきるという間合いで、竿をしごいていた手が追い打ちのように、根元から輪上にした指で擦り上げてきて、最後のほうは搾り取られるように精がびゅつと飛び散る。

そのはずみで下腹部が変に刺激され、あ、と思ったときにはもう遅かった。